

平成10年度 全倫研全国調査報告書

# 高校生の自己意識・価値観・生活意識

(全国高校生一万人調査)

平成12年3月31日

全国高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会

## はじめに

ここ数年、中学生や高校生が大きな事件を起こし、私たちに衝撃を与えつづけている。彼らは今どうなっているのかという問いかけがなされ、その心のありようについてのさまざまな角度からの発言がなされている。

私たちにとっては、眼前にいる高校生の心のうちを、その傾向を読み取ることなしに、授業展開はできない。多くの先生方は、それぞれ生徒の傾向を読み取っておられる。そうした読み取りによって、生徒の持つ課題に対しても適切な指導が可能となる。個々の学校の生徒の状況は、実際には様々である。そうした個別情報と、今回の一万人調査との比較をするのもひとつの作業であろう。私の学校でも、全体傾向と統計的に差異のある項目について検討した。そこから、生徒に対し、何をすべきかの指針も読み取れた。多くの生徒から集められたデータとつき合わせて、詳細な、言うなれば縦と横からの分析をしてみると、私たちが個々にとらえていた生徒像とは異なったものが出てくるのが、この調査報告を見るとわかる。

今回の調査は、今日の生徒の集大成的なものではないが、「このごろの若者はわからない」という言葉に対しても、規範意識など回答の一部を構成することはできると考える。本調査の中には、本研究会で過去十年ほどの間に行なった、数回にわたる調査データとの比較の項目がある。それらのうち、「高校教育に期待するもの」という問い(Q.39)では、「人格形成」を求める傾向が依然として強い。このことは、私たち公民科の教師としては、改めてこの数字の重さをかみしめ、日々の実践の創意工夫を凝らせという数字と受け止める。また、Q.46の「生きていく上で大切にしたいこと」の問いも過去の調査との比較がなされている。「職業生活」などにおいて数字の変化が見られるものの、「好きに暮らす」などを見る限りでは大きな変化があるとは思われない。

過去のデータとの比較で大きな変化は見られないが、まとめにあるように気がかりな部分も垣間見ることができる。気がかりな部分を含め、改めてなぜ、分析困難な事件が起きるのか、学校という生徒を指導する場として詳細な検討が必要である。そして、その検討をもとに、生徒の発達段階にふさわしい授業計画を立て、実行していきたいものである。生徒にとって意味のある授業の創造の一層の推進のために、この調査報告が利用されることを願う。

最後になりましたが、ご協力いただいた全国の先生方、および長期にわたり検討を進められた調査広報部の皆さんに心よりお礼申し上げます。

全国高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会会長 海野省治  
(東京都立永福高等学校長)

# 目 次

## 第一章：調査の目的と方法

1. 調査の目的	-----	3
2. 調査の方法	-----	3
◎調査協力校	-----	4

## 第二章：調査結果と分析

1. 「自己評価」は人生充実の指標	-----	7
2. 「快樂主義者」ほど満足度が低い	-----	13
3. 明らかになった「自律」と「わがまま」の違い	-----	18
4. 求められる「人格教育」、大切にされない「授業」	-----	23
5. 心配だらけの「これからの社会」	-----	27
6. 急激に伸びた女子の「職業志向」と家事育児の「平等志向」	-----	29
7. 情報化・国際化意識に変化の兆し	-----	33
8. 高まる「青年心理」への興味	-----	36
9. まとめ	-----	38

## 資料：質問用紙・集計結果

◎平成10年度 全倫研全国高校生意識調査	-----	42
◎平成10年度 全倫研全国調査 設問別集計表	-----	46

編集後記	-----	57
------	-------	----

## 第一章 調査の目的と方法

## 1. 調査の目的

全国高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会（略称：全倫研）では、昭和62年度以来、全国の高校生を対象として、4回の大規模調査を行ってきた。その目的は、移り変わりの激しい社会の中で生きる高校生に、よりふさわしい公民科教育を行うための基礎資料とするためである。

第二回（平成2年度）・第三回（平成4年度）の調査では、「自己評価と高校生の意識と生活」についての調査を実施した。そこではローゼンバーグの自己評価尺度を用いて、家族・友人・学校生活についての意識との関連を分析し、自己評価尺度が高校生の生活意識と相関する一元的な説明尺度として、一定の有効性を持つことが確かめられた。

また、第四回（平成6年度）の調査では、「高校生にとって大切なもの」についての調査を行い、因子分析によって「課外活動志向」・「知的探求志向」・「自立志向」・「校外交流志向」の四つの志向を割り出し、それぞれの志向の強い高校生がどのような生活意識をもっているかを分析した。

今回の調査では、従来明らかにしてきた高校生の価値観を、より実践的な場面において明らかにするために、「自己評価尺度」を6年ぶりに復活させるとともに、新たに「行動を決定する判断基準」および「自他の関係についての傾向」について、説明尺度を追求することとした。また、学校・友人・家庭に関する質問項目を始め、生活意識を探る設問も新たに作り直し、過去との比較とともに社会の動きにも十分対応したものにした。

## 2. 調査の方法

「自己評価尺度」については、ローゼンバーグの尺度を新たに翻訳しなおし、使用した（設問1～10）。「行動を決定する判断基準」（設問11～15）および「自他の関係についての傾向」（設問16～23）については、いくつかの先行研究を参考にしながら新たに作成した。

「家族・友人・学校・社会問題・公民科教育に関する意識」の調査項目（設問24～53）については、過去に実施してきた全倫研調査との連続性を考慮しつつも、実情に合わせて質問項目や回答の選択肢を吟味した。これによって過去の調査と単純に比較できない部分も生じるが、よりの確な現状把握を可能にした。

さらに、東京都内の高校生名を対象に予備調査を実施、その結果分析と受検者の意見を参考に改訂を加え、質問紙を完成した。

平成10年度夏季大会で協力校を募集・依頼、同秋季大会で速報値を報告、平成11年度秋季大会にて最終報告を行った。調査時期は平成10年9月～平成11年3月、最終有効回答数は10,037名であった。

◎調査協力校（協力者）

【北海道】小樽潮陵（朝川淳一）、札幌厚別（矢倉芳則、木村哲也、井上靖之）、札幌稲雲（西藪友理）、札幌藻岩（河西博之）、千歳（西藪正規）、中川商業（横平麻紀子）、北海道岩内（岩田昭夫）、網走南ヶ丘（元紺谷尊広）、【青森】むつ工業（前田淳一）、【岩手】大東（小野寺俊彦）、【福島】塙工業（島田奈穂美）、白河実業（穴澤宏子）、【栃木】足利工業（島田豊）、【茨城】水戸第二（澤田浩一）、【埼玉】埼玉第一〔現校名：開智〕（永田幸司）、【東京】蒲田（山本正、泉谷まさ）、久留米（三森和哉）、小石川（多田統一）、麴町学園（小泉博明）、攻玉社（杉原安）、国分寺（大谷いづみ）、小平西（西尾明）、中央学院大学中央（中尾佳彦）、東京女学館（福原孝明）、日大二（小林和久）、永福（海野省治）、飛鳥（渡辺安則）、航空高専（和田倫明）、【千葉】市立松戸（山田幹夫）、【神奈川】横浜市立桜丘（鈴木茂樹）、【新潟】有恒（桐原雅史）、【長野】諏訪清陵（田中延男）、【山梨】峡北（宮川尚巳）、【静岡】庵原（深沢秀明）、【大阪】大教大天王寺（甲山和美）、【奈良】帝塚山（羽尻嵩）、【富山】富山、富山女子、富山北部（田中厚）、【石川】金沢西（西野正洋）、【兵庫】雲雀丘（板倉宏明）、北摂三田（森嶋久幸）、【三重】朝明（平野義人）、【岡山】邑久（赤澤大史）、金川（河本邦雄）、【広島】美鈴が丘（井上信治）、【山口】山口（又野郁雄）、【愛媛】今治東（小田範彦）、【高知】高知丸の内（寺尾隆二）、【福岡】福岡商業（河村敬一）、【熊本】菊池（東正典）。

[順不同、敬称略、所属は調査時点]

## 第二章 調査結果と分析

## 1. 「自己評価」は人生充実の指標

ローゼンバーグの「自己評価尺度」は、家庭・学校・友人関係の満足度と強い相関があり、高校生の適応感を捉えるためにたいへん有効な尺度である。

### (1) 自己評価尺度とは

アメリカの社会心理学者ローゼンバーグが、「自己評価尺度」というものを開発している。10の質問項目で、被験者の自己評価を図るもので、これまでに広く用いられてきた。全倫研調査でも平成4年度（前々回）の調査でこれを用いている。

今回の調査では、元の尺度を訳し直し、言葉遣いを再検討して若干の変更を加えた。生徒にとって理解しやすい表現を求めたためである。したがって、結果について前回調査との単純比較はできないが、かといってそれほど大きな変更ではないから、注意しながら比較することには意味があると思われる。

今回の調査で使用されたのは、以下のような設問である。

質問:あなたは、次の各項目についてどのように思いますか。

[1] その通り [2] どちらかといえばその通り

[3] どちらかといえば違う [4] 違う

1. 私は自分に満足している
2. 私はダメな人間だと思うことがよくある
3. 私には長所がたくさんある
4. 私は普通の人と同じくらいやっていく力はある
5. 私は役に立たない人間だ
6. 私には自慢できるところがない
7. 私は少なくとも他の人たちと同じくらいは価値のある人間である
8. 私はもっと自分自身を尊敬する気持ちになれないものかと思う
9. 私は結局のところ人生の失敗者だと思いたくなる
10. 私はいつも自分自身を肯定的に認めている

2. 5. 6. 8. 9 は逆転項目である。

集計には、単純合計を用いる方法が一般的であるが、前々回調査では後述のような換算値を用いた。本年度の調査では、平成4年度の調査との比較のために、同じ換算値を用いる一方、自己評価の高いグループと低いグループの比較には、一般的な単純合計の分布を用いることとした。



## (2) 全体的傾向

平成4年度調査で用いられた換算値は、次のようにして算出される。

- |   |    |
|---|----|
| 1. [3]または[4]                                    | 1点 |
| 2. [1]または[2]、または5. [1]または[2]                    | 1点 |
| 3. [3]または[4]、7. [3]または[4]、9. [1]または[2]、いずれか二つ以上 | 1点 |
| 4. [3]または[4]、または6. [1]または[2]                    | 1点 |
| 8. [1]または[2]                                    | 1点 |
| 10. [3]または[4]                                   | 1点 |

この方法によると、自己評価尺度の得点は0点（もっとも自己評価が「高い」）から6点（もっとも自己評価が「低い」）までの7段階にまとまる。「得点が低い」ほど「自己評価が高い」ことに気をつけなければならない。

その結果は、前々回調査に比べて、換算値で3・4点が減って、0～2点、5・6点が増えている。前述の通り、若干の変更があるから留保付きであるが、自己評価の高いグループと低いグループに分化する傾向があるかもしれない。

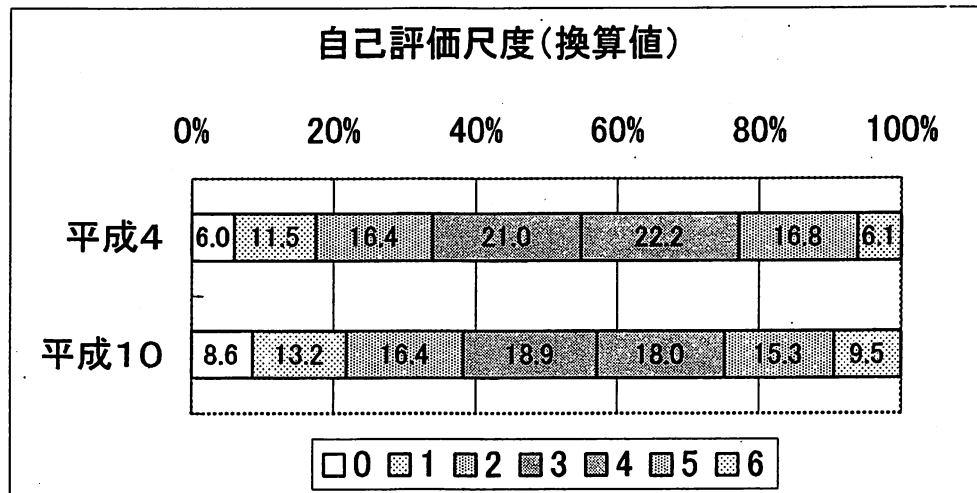


図 2-1-1. 自己評価尺度(換算値)比較(平成4年度・10年度)

## (3) 男女別比較

一般的傾向として、女子のほうが男子よりもやや低い傾向がある。これは女子のほうが「自分自身を見る目」が厳しいのかもしれないし、あるいは男性中心に進んできた社会で女性に不全感が生じやすいのかもしれない。

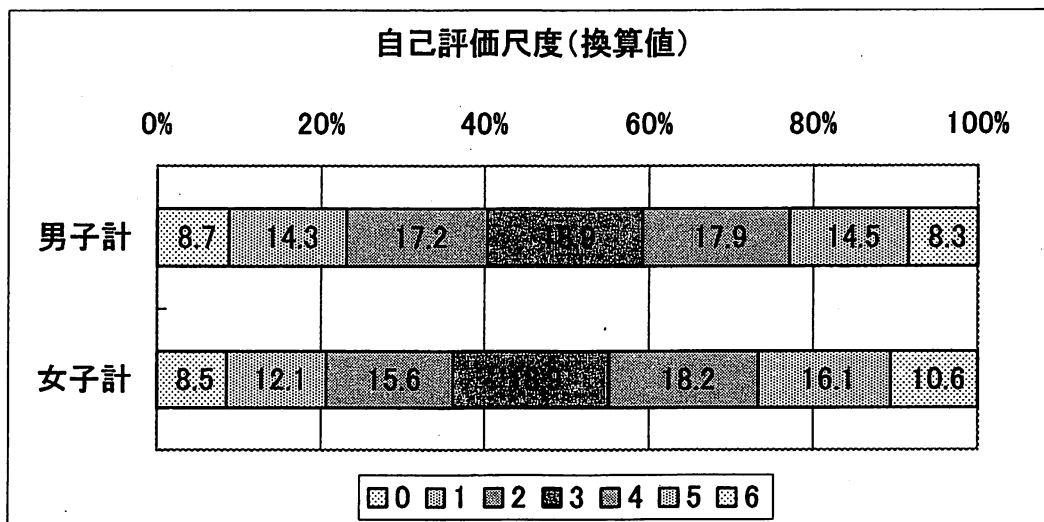


図 2-1-2. 自己評価尺度(換算値)男女別比較

#### (4) 自己評価尺度の因子分析

本調査ではケース数が多いので、自己評価尺度そのものを検討するために、因子分析を試みた。その結果によると、自己評価尺度の下位尺度として、第一因子「自己効力感」と第二因子「自己価値感」を見出すことができた。前者は「自分には何かを成す力がある」という意識で、後者は「自分が自分であるということに十分に価値がある」という意識である。「自信」と「自尊」と言い換えても良いかもしれない。生徒に自己評価を高めさせる働きかけをするときには、この二つの因子を働きかけの視角として考慮するとよいであろう。

#### 因子分析(主成分分析・バリマックス回転)

	I	II
Q7 私は少なくとも他の人たちと同じくらいは価値のある人間である	0.778	-0.102
Q4 私は普通の人と同じくらいやっていく力はある	0.749	-0.012
Q5 私は役に立たない人間だ	-0.635	0.396
Q6 私には自慢できるところがない	-0.590	0.378
Q3 私には長所がたくさんある	0.581	-0.330
Q8 私はもっと自分自身を尊敬する気持ちになれないものかと思う	0.196	0.749
Q2 私はダメな人間だと思うことがよくある	-0.252	0.636
Q1 私は自分に満足している	0.320	-0.567
Q9 私は結局のところ人生の失敗者だと思いたくなる	-0.367	0.562
Q10 私はいつも自分自身を肯定的に認めている	0.293	-0.467
固有値	3.770	1.150
寄与率	37.7	11.5

表 2-1-1. 自己評価尺度 因子分析結果

(5) 自己評価高位群と低位群の比較

自己評価尺度の単純合計は、比較的正規分布に近い形になるので、自己評価の高いグループと低いグループをそれぞれ約25%ずつ選び、他の質問項目への回答とクロス集計してみた。その主なものは別掲の通りだが、ほとんどの項目で明らかな違いが現れていることは注目に値する。

まず、「心を開いて話せる友人」・「いっしょに楽しむ多くの友人」いずれも、高位群のほうがより「大切」と答え(Q. 24, 25)、かつ実際に「いる」割合も高い(Q. 26, 27)。

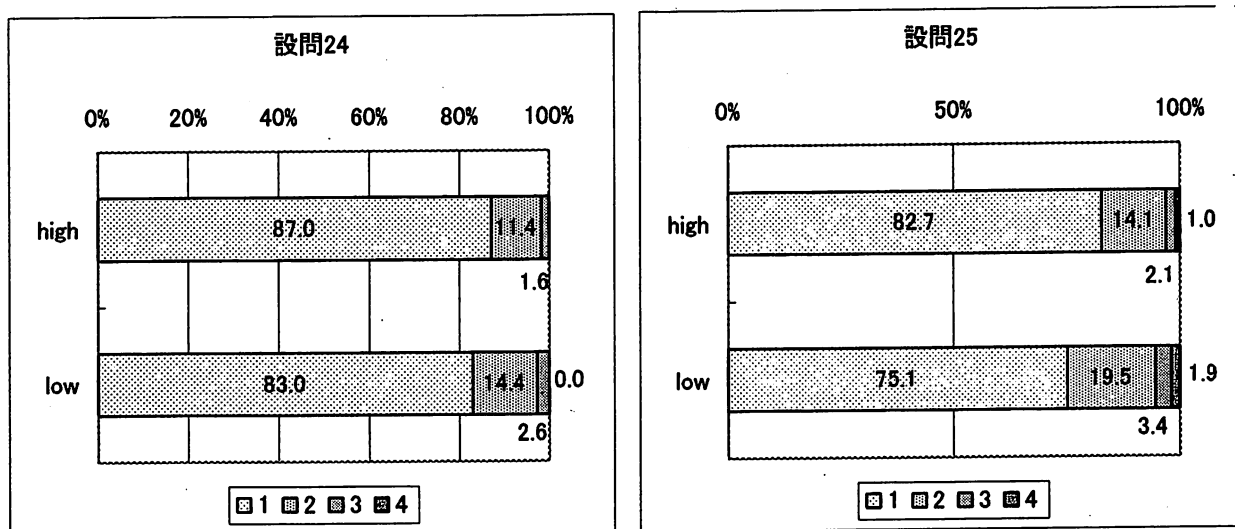


図 2-1-3(1) (2) 自己評価高位群・低位群クロス集計(1) (2)

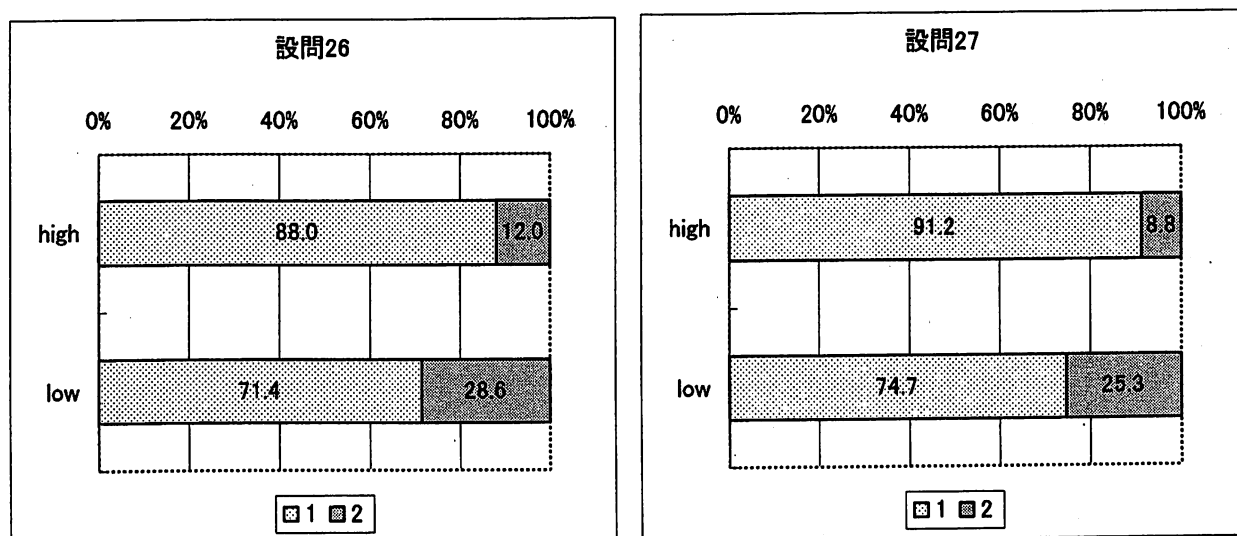


図 2-1-3(3) (4) 自己評価高位群・低位群クロス集計(3) (4)

「家族生活の満足度」(Q. 28)は、「満足」が高位群 50.0%に対して低位群 24.5%と、ほぼ2倍の開きがある。「親・保護者と理解しあえている」(Q. 29)と「思う」者は高位群 36.0%に対して下位群 14.7%、「高校生になってから信頼して責任を持たせてくれるようになった」(Q. 31)と「思う」者は高位群 37.2%に対して下位群 16.2%と、さらに大きな開きがある。「精神的に親離れをしている」(Q. 32)と「思う」者も、上位群 30.7%に対して下位群 20.6%と、開きがある。

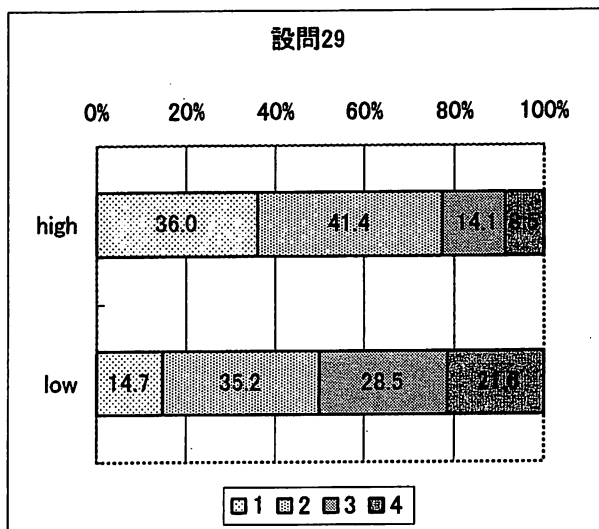
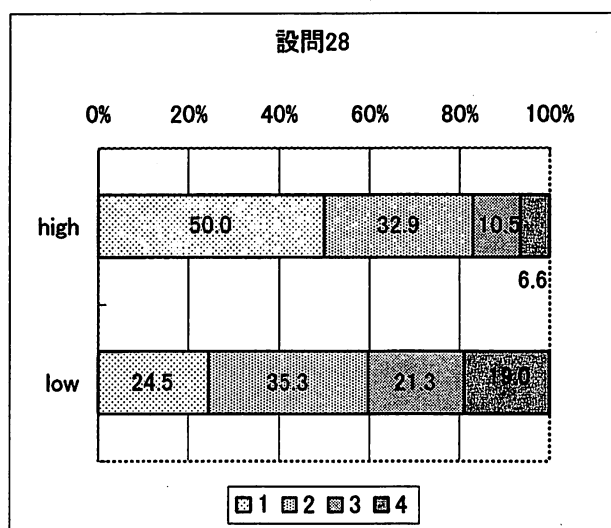


図 2-1-3(5)(6) 自己評価高位群・低位群クロス集計(5)(6)

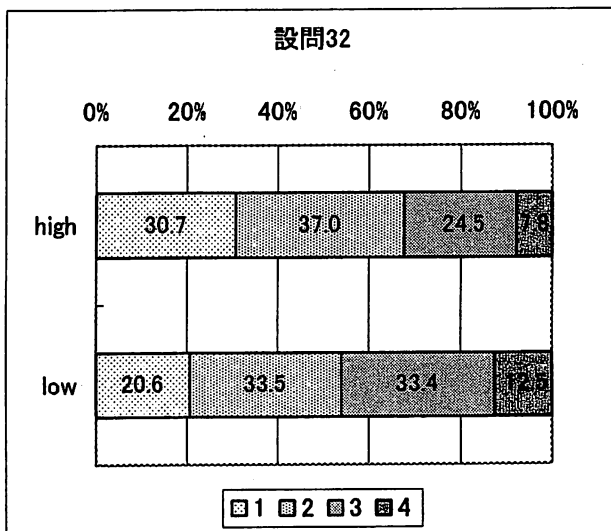
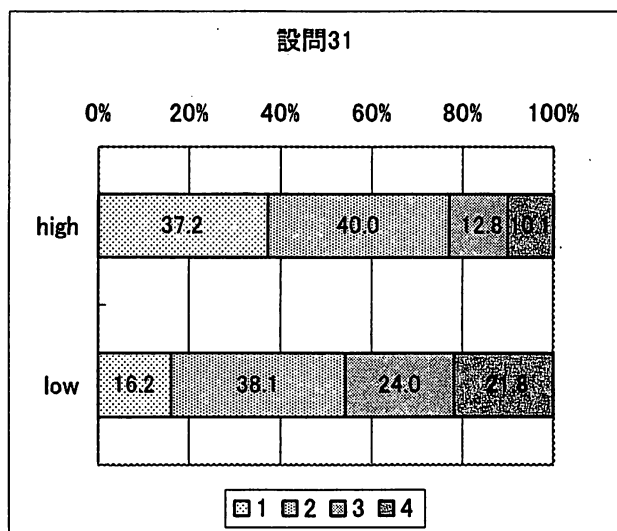


図 2-1-3(7)(8) 自己評価高位群・低位群クロス集計(7)(8)

さらに、「学校生活の満足度」(Q. 34)は、「満足」が高位群 29.3%に対して低位群 9.7%、「学校の授業についていけるか」(Q. 36)では、「すべて」が高位群 17.0%に対して低位群 5.2%などと、ほぼ3倍の開きを見せる。「友人関係の満足度」(Q. 38)は、「満足」が高位群 55.6%に対して低位群 27.5%などとなっている。

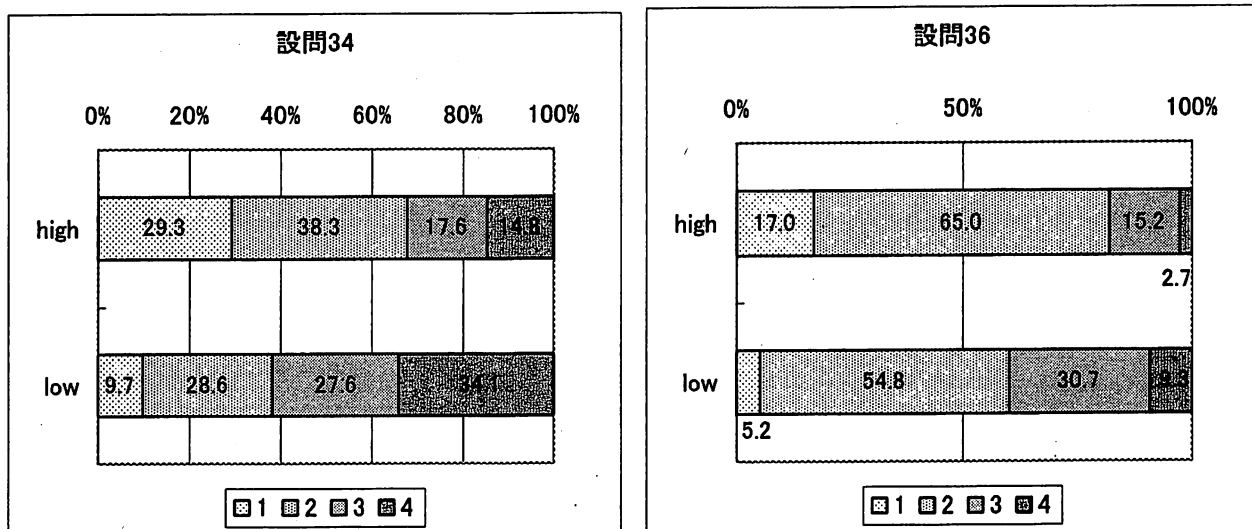


図 2-1-3(9)(10) 自己評価高位群・低位群クロス集計(9)(10)

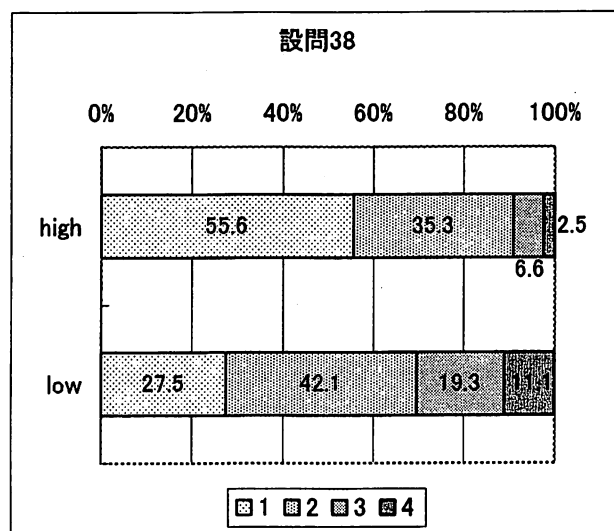


図 2-1-3(11) 自己評価高位群・低位群クロス集計(11)

このように、自己評価の高低と友人・家庭・学校の満足度には、明らかに相関がある。とりわけ、学校生活については、目だって両群の開きが大きく、学校生活の充実度と自己評価は、切っても切れない関係にあると言えるだろう。因果関係が明らかでないが、自己評価の低い生徒の適応を高めるためには、「自信」と「自尊」を与えるようなアプローチが、学校において多面的に展開されることが有効であるという可能性は指摘できるであろう。

## 2. 「快樂主義者」ほど満足度が低い

快樂原則で行動を決める高校生のほうが、道德原則で行動を決める高校生より、家庭・学校・友人の満足度が低い。

### (1) 「行動決定の基準」尺度

現代の高校生を理解するために、彼らが自分の行動を決める時にどのような基準を優先して判断するかを明らかにしようとしたのが、設問 11～15 である。これは昭和 62・63 年度調査で行った類似の設問に加除し、さらに予備調査で得た意見をもとに修正して作られた。その設問は、以下の通りである

質問：あなたは行動を起こすときに、次のことをどれほど重視しますか。次の4段階で教えてください。

[1] する [2] どちらかと言えばする [3] どちらかと言えばしない [4] しない

11. 正しいか正しくないか
12. 他人や世の中の役に立つか立たないか
13. 自分にとって面白いか面白くないか
14. 人によく思われるか悪く思われるか
15. 自分の利益になるかならないか

### (2) 因子分析結果

この結果を因子分析した結果が、下表である。

#### 因子分析(主成分分析・バリマックス回転)

	I	II
Q12 他人や世の中の役に立つか立たないか	0.802	-0.065
Q11 正しいか正しくないか	0.774	-0.040
Q14 人によく思われるか悪く思われるか	0.509	0.453
Q15 自分の利益になるかならないか	0.028	0.817
Q13 自分にとって面白いか面白くないか	-0.093	0.787
固有値	1.60	1.41
寄与率	32.1	28.1

表 2-2-1. 「行動決定の基準」因子分析結果

設問 11「正しいか正しくないか」および 12「他人や世の中の役に立つか立たないか」が第一因子、13「自分にとって面白いか面白くないか」および 15「自分の利益になるかなら

ないか」が第二因子の負荷が大きかった。14「人によく思われるか悪く思われるか」は、同程度の負荷であったので、以下の分析には使用していない。

因子の命名であるが、第一因子を「道德原則」、第二因子を「快樂原則」と名づけた。

### (3)「道德原則タイプ」と「快樂原則タイプ」

因子負荷の大きな項目それぞれの得点合計の差の分布を見てみると、比較的正規分布に近いので、高位群と低位群 20～30%を目安として「道德原則タイプ」と「快樂原則タイプ」のグループ分けを行ない、他設問とのクロス集計を試みた。

「道德原則タイプ」は、心を開いて話せる友人をより大切と考え、また実際に心を開いて話せる友人がいる割合が高い(Q. 24, 26)。家族生活への満足度も高く、理解し合えている、信頼されていると答える割合も高い(Q. 28, 29, 31)。親との意見対立の割合は、ほぼすべての項目で「快樂原則タイプ」が上回る。学校生活に満足している者、希望入学、授業について行ける程度も「道德原則タイプ」が高い(Q. 34, 35, 36)。友人関係の満足度も若干高い(Q. 38)。

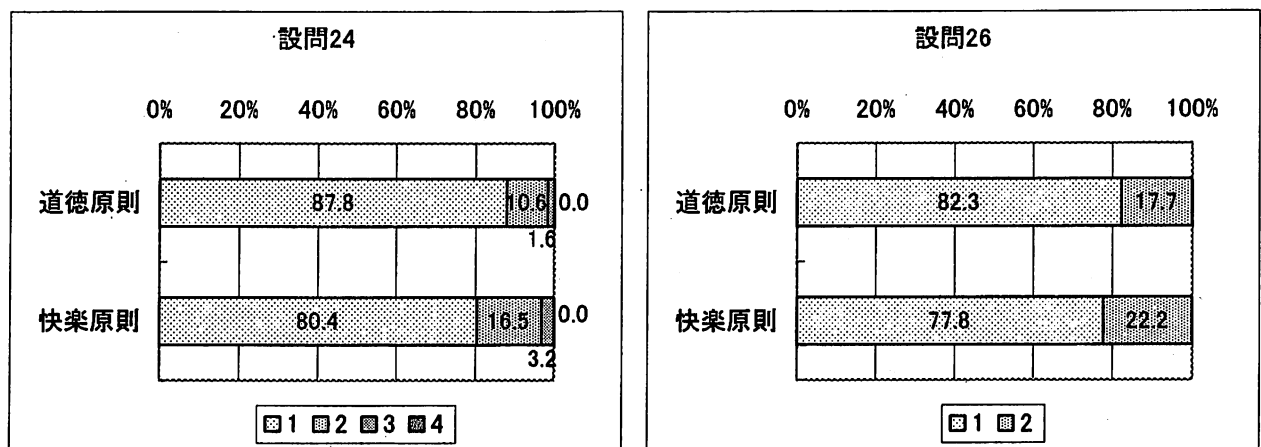


図 2-2-1(1)(2)「道德原則タイプ」「快樂原則タイプ」クロス集計(1)(2)

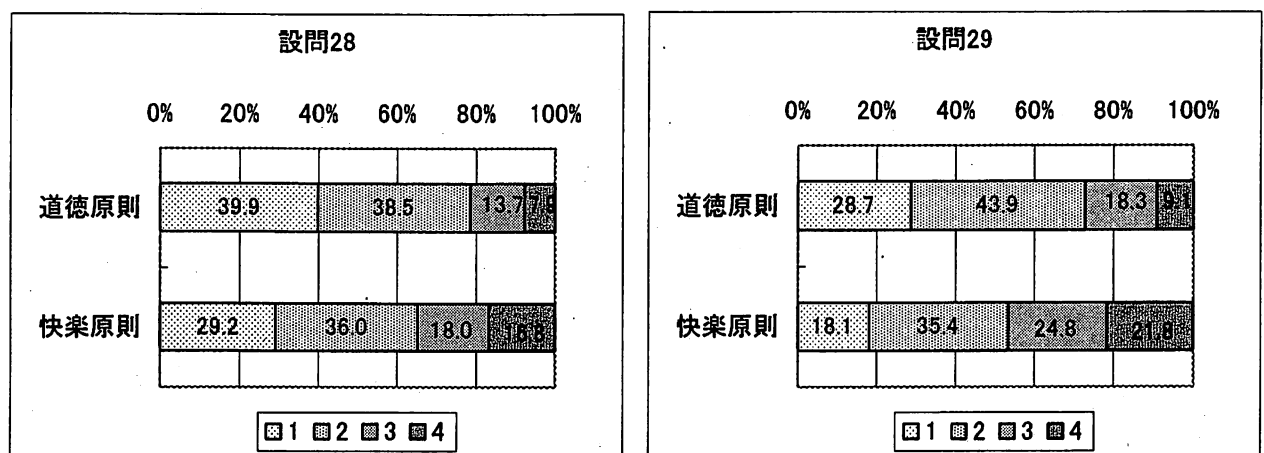


図 2-2-1(3)(4)「道德原則タイプ」「快樂原則タイプ」クロス集計(3)(4)

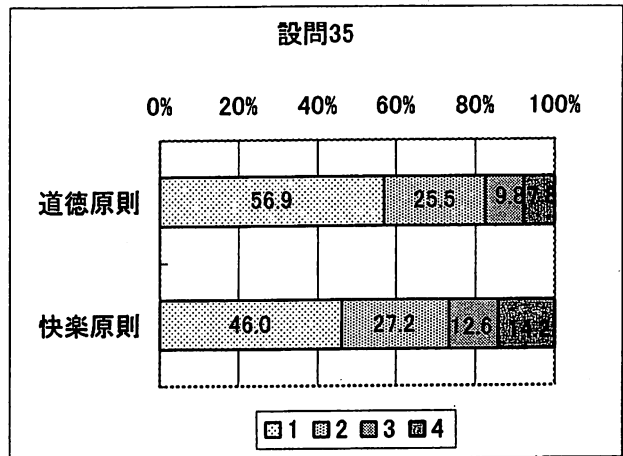
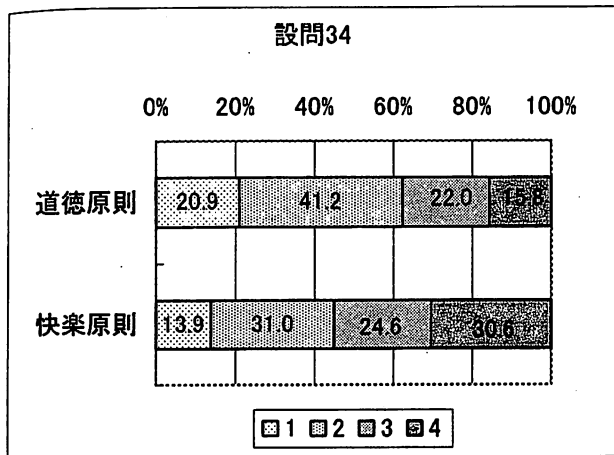


図 2-2-1(5) (6)「道徳原則タイプ」「快楽原則タイプ」クロス集計(5) (6)

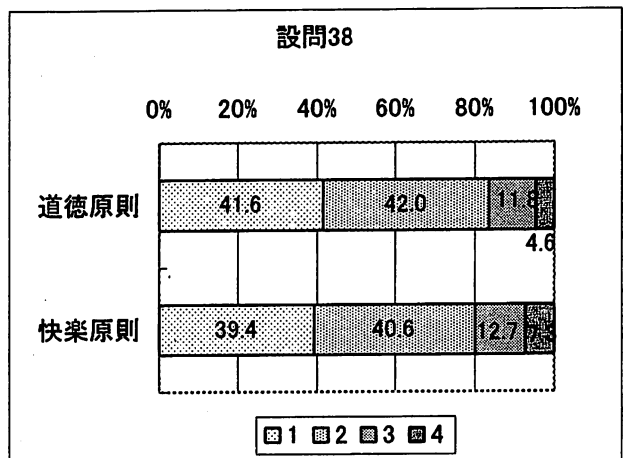
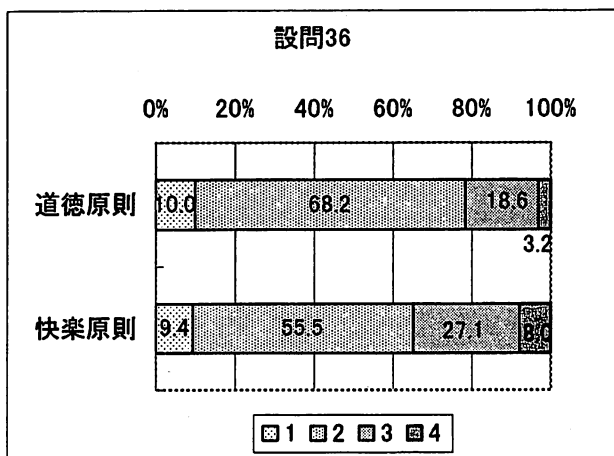


図 2-2-1(7) (8)「道徳原則タイプ」「快楽原則タイプ」クロス集計(7) (8)

出席や遅刻に関する意識にはきわめて大きな開きがあり、休んだり遅刻したりしても良いとする割合は「快楽原則タイプ」は「道徳原則タイプ」の倍以上である(Q. 40-43)。学校生活で生き方を考えさせられた場面は、「その他」以外すべてで「道徳原則タイプ」に多く、「なし」は「道徳原則」9%に対して「快楽原則」21%である(Q. 44)。

生き方に関しては、「道徳原則」タイプは「職業生活志向」や「家庭生活志向」の割合が大きい、「快楽原則」タイプは「経済的豊かさ」や「好きなように」が多い(Q. 46)。

このように見てくると、「道徳原則」と「快楽原則」の二つの生き方は、少なくとも高校生の生活次元においては、ほとんどの局面で適応感や幸福感において大きな差があるように思われる。とりわけ、学校そのものに対する価値観や帰属意識に、その違いがもっとも先鋭化して現れている。



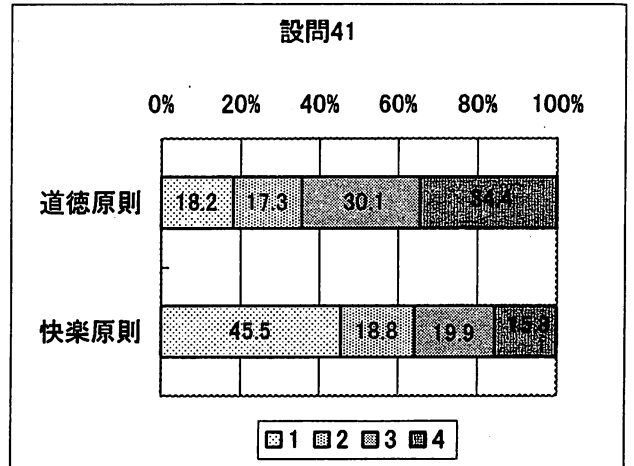
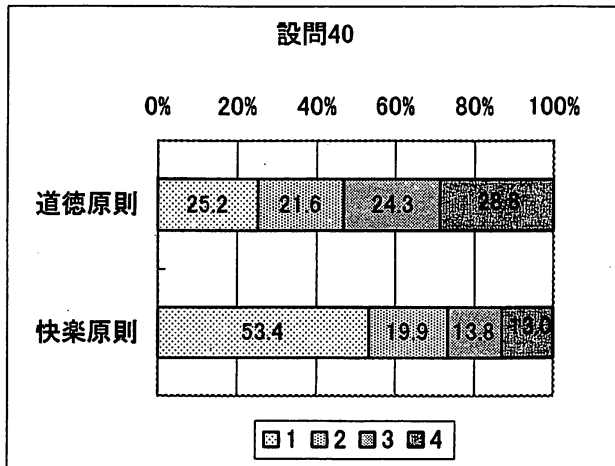


図 2-2-1(9)(10)「道徳原則タイプ」「快楽原則タイプ」クロス集計(9)(10)

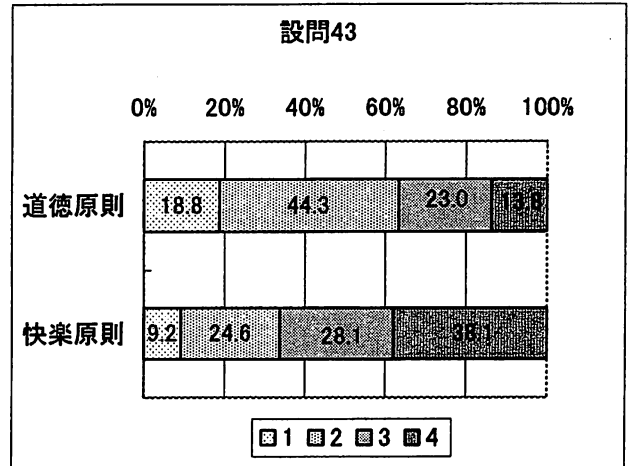
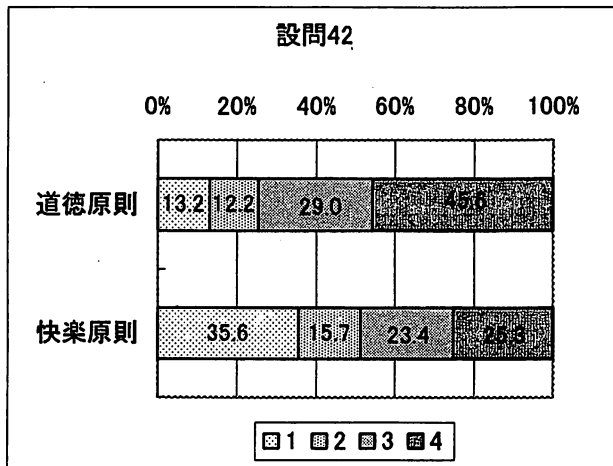


図 2-2-1(11)(12)「道徳原則タイプ」「快楽原則タイプ」クロス集計(11)(12)

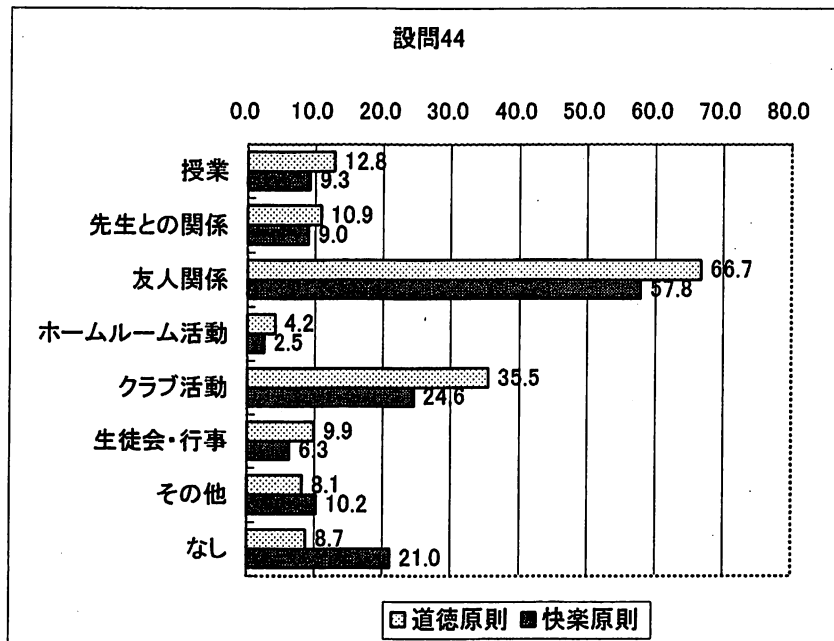


図 2-2-1(13)「道徳原則タイプ」「快楽原則タイプ」クロス集計(13)

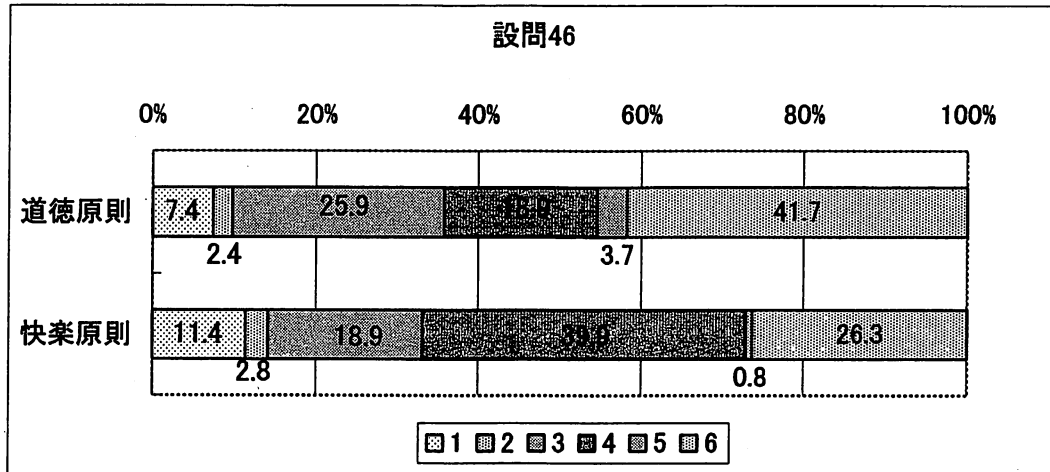


図 2-2-1(14)「道徳原則タイプ」「快楽原則タイプ」クロス集計(14)

快楽原則で行動していながら満足感が得られていない、という状況は、因果関係で見ればパラドックスであるが、むしろ相関関係で見ると悪循環が生じていると考えるのが妥当であろう。この悪循環を断ち切るような働きかけができるかどうかで、「快楽原則」タイプの生徒にとって学校生活の質は大きく変わってくるであろう。

最後に、この設問をアレンジした判定用紙を付す。

◎あなたは「道徳原則タイプ」それとも「快楽原則タイプ」？

Q.あなたは行動を起こすときに、次のことをどれほど重視しますか。次の4段階で教えてください。

する(4点)   どちらかといえばする(3点)   どちらかといえばしない(2点)   しない(1点)

A「正しいか正しくないか」

B「自分にとって面白いか面白くないか」

C「他人や世の中の役に立つか立たないか」

D「自分の利益になるかならないか」

(A+C) - (B+D)が「1以上」なら、「道徳原則タイプ」

(A+C) - (B+D)が「マイナス2以下」なら、「快楽原則タイプ」

それ以外は、中間型です。

### 3. 明らかになった「自律」と「わがまま」の違い

「自己中心的」と十把一絡げに言われがちな高校生であるが、「自律」と「わがまま」との違いが今回の調査で明らかになった。「自律」タイプは家庭・学校・友人関係満足度も高い。

#### (1)「自他関係の傾向」尺度

行動する時に自分がどのような自他関係についての傾向を持っているか、8項目で尋ねてみたのが、設問16～23である。これらの項目は、各種調査も参考にしながら、主に対他関係に関してしばしば耳にするような意見を並べたものである。

質問：あなたは次の各意見についてどのように思いますか。次の4段階で教えてください。

[1] その通り [2] どちらかと言えばその通り

[3] どちらかと言えば違う [4] 違う

- 16. 働く事や勉強する事は最低限にして、自由な生活を楽しみたい
- 17. 人と付き合うときは、お互いにプライバシーを侵さないようにしたい
- 18. 自分一人が努力しても、世の中は良くならない
- 19. 何事も、自分でやってみないとわからない
- 20. ボランティア活動や奉仕活動をしたい
- 21. いつでも自分の気持ちに素直に行動すべきだ
- 22. 他人のために時間を取られたくない
- 23. 自分で納得のいかないことは、絶対にしない

#### (2) 因子分析結果

この結果を因子分析したものが、下表である。

##### 因子分析(主成分分析・バリマックス回転)

	I	II	III
Q22 他人のために時間を取られたくない	0.647	0.066	0.130
Q20 ボランティア活動や奉仕活動をしたい	-0.608	0.186	0.375
Q18 自分一人が努力しても、世の中は良くならない	0.581	-0.146	0.131
Q16 働く事や勉強する事は最低限にして、自由な生活を楽しみたい	0.517	0.167	0.006
Q21 いつでも自分の気持ちに素直に行動すべきだ	-0.003	0.718	-0.015
Q23 自分で納得のいかないことは、絶対にしない	0.282	0.644	-0.034
Q19 何事も、自分でやってみないとわからない	-0.248	0.636	0.132
Q17 人と付き合うときは、お互いにプライバシーを侵さないようにし	0.153	0.012	0.921
固有値	1.57	1.45	1.00
寄与率	19.6	18.1	12.5

表 2-3-1. 「自他関係の傾向」因子分析結果

因子分析の結果、設問 16「働くことや勉強することは最低限にして・・・」、18「自分一人が努力しても・・・」、20「ボランティア活動や奉仕活動をしたい」（マイナスの負荷）、22「他人のために時間を取られたくない」の4項目が第一因子、19「何事も、自分でやってみないと分からない」、21「いつでも自分の気持ちに素直に行動すべきだ」、23「自分で納得の行かないことは、絶対にしない」の3項目が第二因子の負荷が大きかった。第三因子は、今回の調査では利用しなかった。

因子の命名であるが、第一因子を「わがままさ」、第二因子を「自律」とした。前者には「孤立」、後者には「積極性」とでも言うべきものも感じられるので、必ずしも十全に意味を表す命名ではないが、そのような意味合いを含んでいることに注意しながら分析することにし、この命名を採用した。

### (3)「自律タイプ」と「わがままタイプ」

因子負荷の大きな項目の合計点の差の分布を見ると、比較的正規分布に近いので、高位群と低位群 20～30%を目安として「わがままタイプ」と「自律タイプ」のグループ分けを行なった。

他の項目の回答を、それぞれのグループごとにクロス集計してみたところ、友人の大切さや友人がいるかどうか(Q. 24, 25, 26, 27)、家族の満足度・相互理解・信頼(Q. 28, 29, 31)、学校の満足度など(Q. 34, 35, 36)、友人の満足度(Q. 38)など、「自律タイプ」が「わがままタイプ」を大きく上回っている項目が多いことがわかった。「高校教育への期待」(Q. 39)は、「自律タイプ」が人格教育で約 10%、「わがままタイプ」が進路指導で約 10%上回っているのも興味深い。出席や遅刻に関する意識は、休んだり遅刻したりしても良いとする割合が、「わがままタイプ」は「自律タイプ」を大きく上回る(Q. 40-43)。生き方に関しては、「自律タイプ」は「職業生活志向」や「家庭生活志向」の割合が大きい、「わがままタイプ」は「経済的豊かさ」や「好きなように」が多い(Q. 46)。

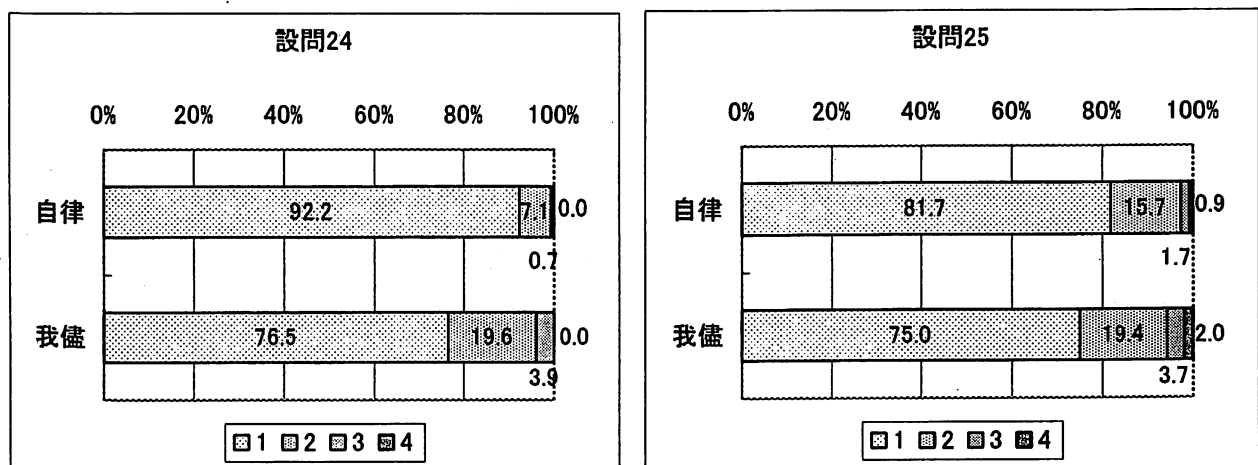


図 2-3-1(1)(2) 「自律タイプ」「わがままタイプ」クロス集計(1)(2)

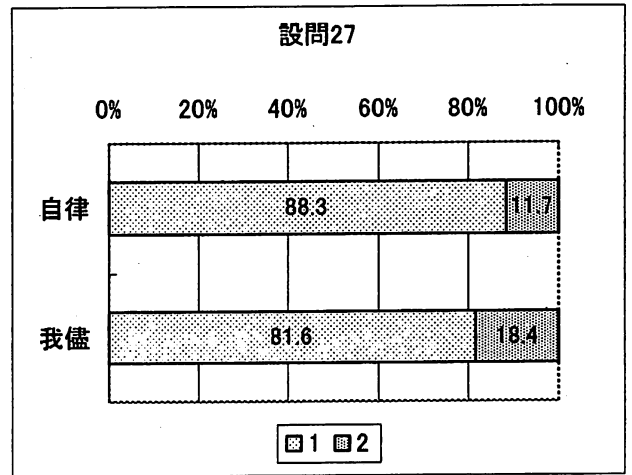
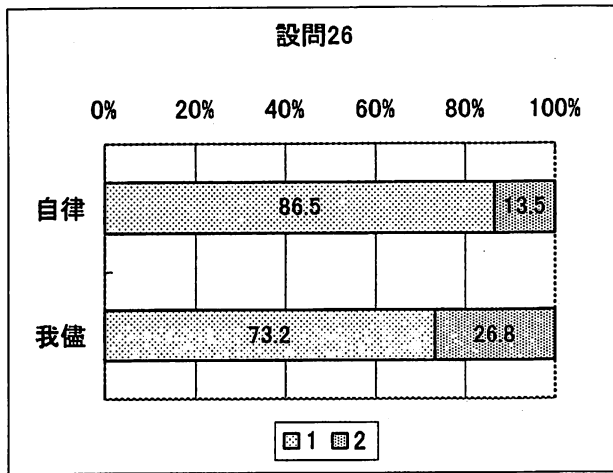


図 2-3-1(3)(4) 「自律タイプ」「わがままタイプ」クロス集計(3)(4)

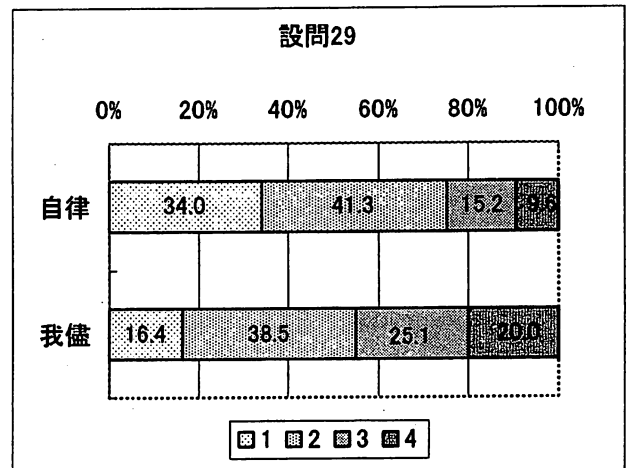
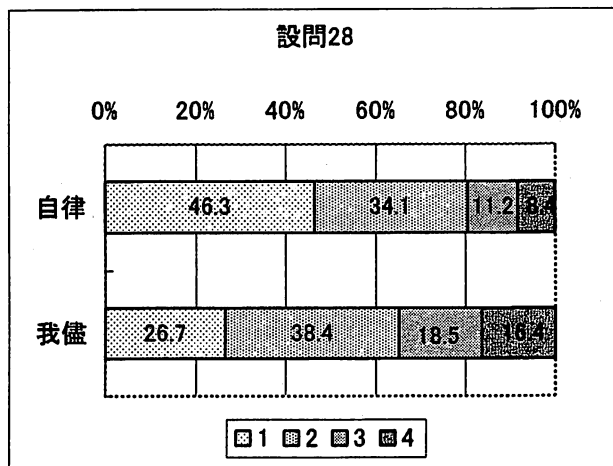


図 2-3-1(5)(6) 「自律タイプ」「わがままタイプ」クロス集計(5)(6)

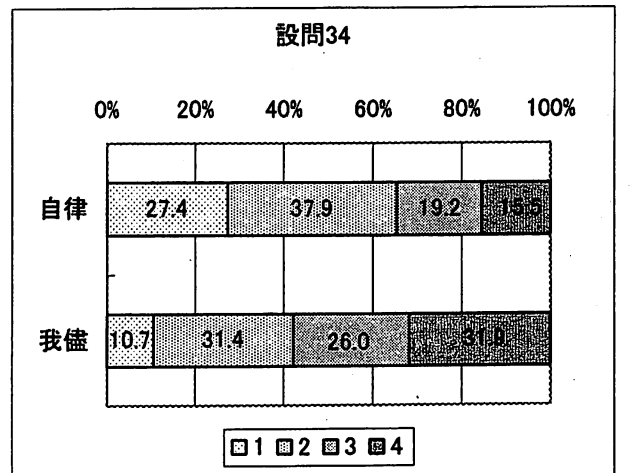
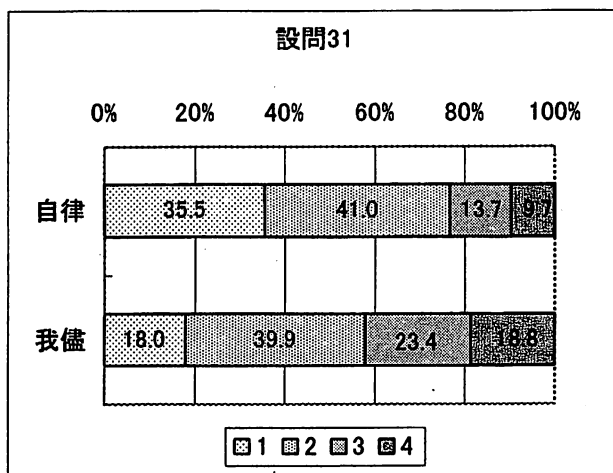


図 2-3-1(7)(8) 「自律タイプ」「わがままタイプ」クロス集計(7)(8)

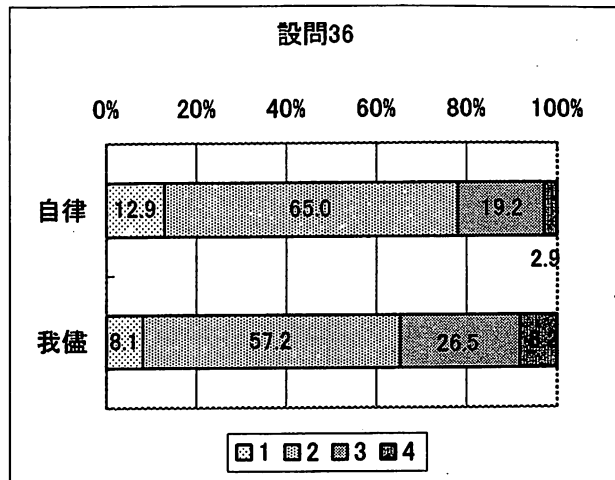
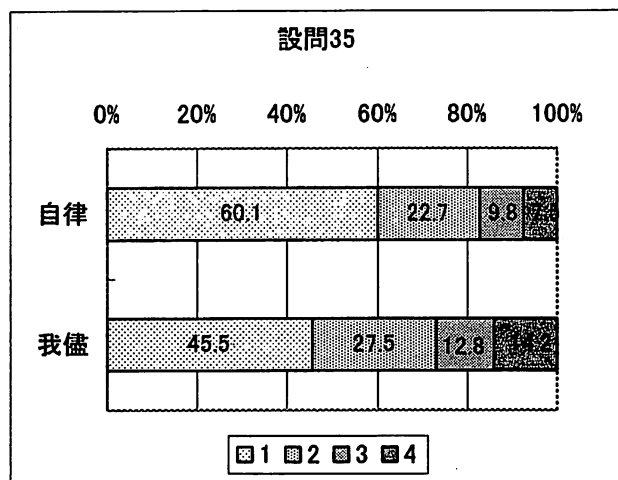


図 2-3-1(9)(10) 「自律タイプ」「わがままタイプ」クロス集計(9)(10)

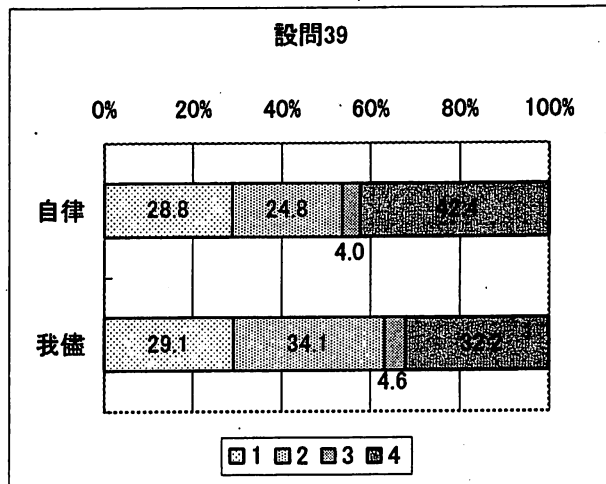
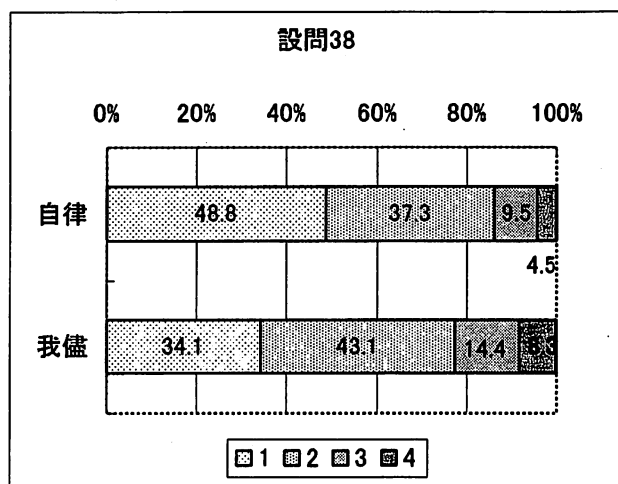


図 2-3-1(11)(12) 「自律タイプ」「わがままタイプ」クロス集計(11)(12)

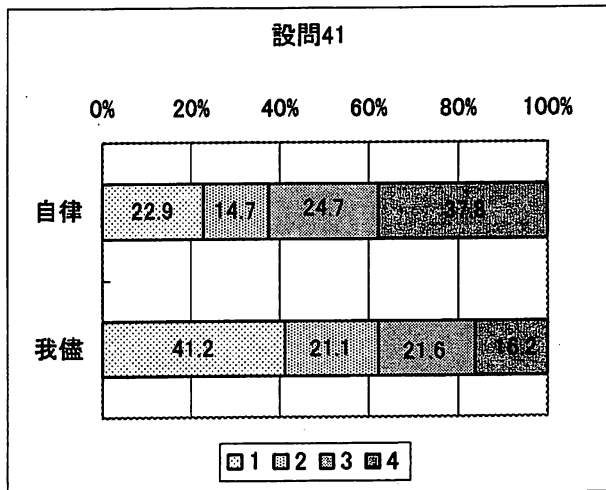
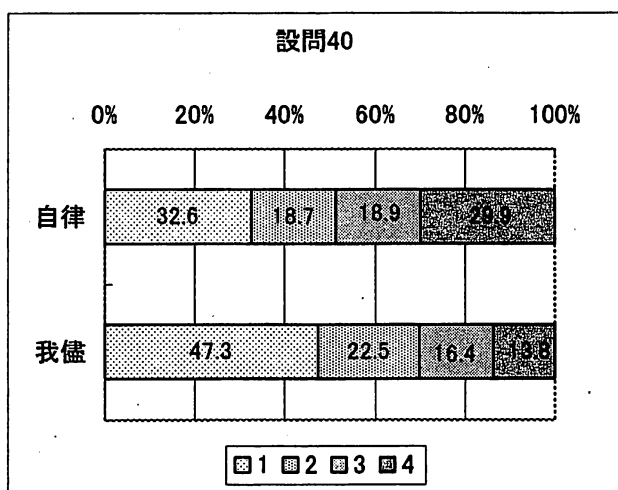


図 2-3-1(13)(14) 「自律タイプ」「わがままタイプ」クロス集計(13)(14)

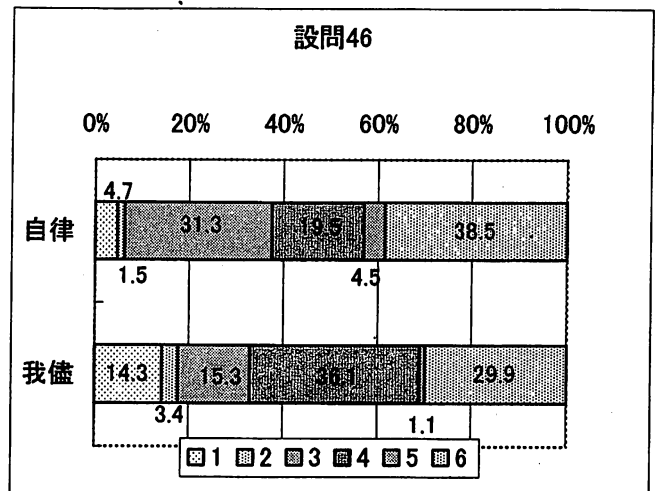
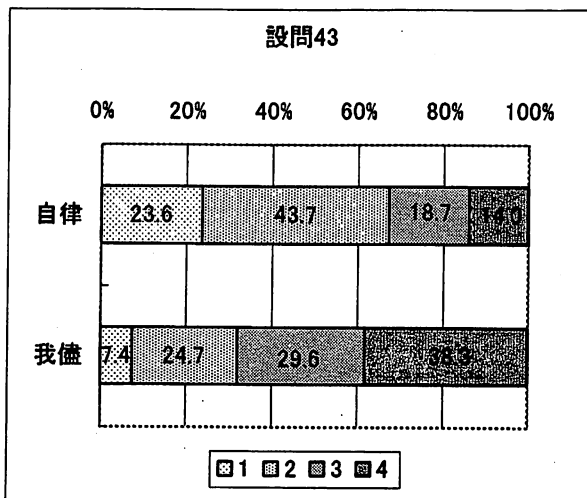


図 2-3-1(15)(16) 「自律タイプ」「わがままタイプ」クロス集計(15)(16)

このように、「わがまま」と「自律」が独立した因子であることに注目したい。漠然とこれらの項目を見ただけでは、いずれも自己中心的な言い分のように思われがちであるが、「わがままタイプ」は家庭・学校・友人関係に満足の割合が低いが、「自律タイプ」は高いのである。あらためてこれらの項目を見ると、「わがままタイプ」は行動に消極的で、「自律タイプ」は積極的である。「自律タイプ」は積極性をもって他者と交わるので、結果的に満足な関係性に行きついているが、「わがままタイプ」は他者との関係性が希薄なまま、不全感を抱いている、と考えられる。

最後に、この設問をアレンジした判定用紙を付す。

◎あなたは「わがままタイプ」それとも「自律タイプ」?

Q.あなたは次の各意見についてどのように思いますか。次の4段階で教えてください。

その通り(4点) どちらかといえばその通り(3点) どちらかといえば違う(2点) 違う(1点)

A「働くことや勉強することは最低限にして、自由な生活を楽しみたい」

B「何事も、自分でやってみないと分からない」

C「自分一人が努力しても、世の中は良くならない」

D「いつでも自分の気持ちに素直に行動すべきだ」

E「ボランティア活動や奉仕活動をしたい」

F「自分で納得の行かないことは、絶対にしない」

G「他人のために時間を取られたくない」

(B+D+F) - (A+C+(5-E)+G)が「6以上」なら「自律タイプ」

(B+D+F) - (A+C+(5-E)+G)が「1以下」なら「我儘タイプ」

それ以外は、中間型です。